

## ストラトニケとアフロディテ・ストラトニキス

田 中 穂 積

—

デメトリオス・ポリオルケテスとフィラの間生まれたストラトニケは、ディアドコイの戦乱期に成長した。彼女の生年は不明であるが、年代順にみて、彼女の動向が知られるのは、政略結婚によってセレウコス一世の許に嫁いだ時である。その結婚の理由として、のちにプルタルコスがデメトリオスについて記述した中で、セレウコス一世にはアパマとの間にアンティオコス（一世）という息子があったが、自分の領土の大きさからいって、まだ多くの後継者を持つてもよいと考えたことや、それに他の王達がそれぞれに姻戚関係を結んでゆくのに倣ったからであるとしている（イブソス会戦（前二〇一年）後、Plut. Demetr. 31）。

このうち、ストラトニケはセレウコス一世の子アンティオコス一世と結婚した。この結婚について、またプルタルコスは同じ記述の中で、詳しくエピソードをあげている。つまり、アンティオコスは、セレウコス一世の子供を生ん

でなお若かったストラトニケに恋慕し、自分の立場を考えて死ぬほど煩悶したが、やがて父に許されて結婚することができたという (Plut. Demetr. 38)。その伝承の由来については不明であるが、プルタルコス以後、アッピアノスとルキアノスに同じような記述がみられる (Appian. Syr. 59; Lucian. de dea Syr. 17-18)。その結婚がプルタルコスのようなエピソードによるものではなく、他に原因を求めるとすれば、セレウコス一世はストラトニケと結婚したのち、デメトリオスと敵対関係に入ったことがあげられる (Plut. Demetr. 32-33)。しかしそれは決定的な理由とはならない。離婚に際しては、彼女をアンティオコス一世と結婚させず、むしろデメトリオスの許に返すのが順当であろう。またルキアノスは、ストラトニケとアンティオコス一世の結婚について記したあと、ストラトニケとコンバボス神の愛というファンタジーをあげている (Lucian. de dea Syr. 19)。後述するようにストラトニケは多くの神々を崇拜していることから、そのような物語がのちに彼女の周辺に纏わったかも知れない。ともあれ、ストラトニケとアンティオコス一世の結婚には、セレウコス朝の内部事情が絡んでいたことは確かであろう。この結婚によってアンティオコス一世は父の共同統治者として、エウフラテス河東方の支配を委ねられた(前二九四—二九三年)<sup>(1)</sup>。そののちのストラトニケの消息を詳しく伝えるものはない。そこで散見する資料をたどってみると、そこにはアンティオコス一世の王妃としてだけでなく、彼女自身に、ある特徴が浮かんでくる。それがスミルナにおけるアフロディテ・ストラトニクス崇拜として現われているのであるが、その経緯を考えながら、ヘレニズム時代における王家の一女性の立場を取上げてみたい。

註(1) W. W. Tarn, *Antigonos Gonatas* (1912) p. 349. CAH VII p. 93; K. J. Beloch, *Griechische Geschichte*, IV 1 (1925) S. 220 Ann. 1; Geyer, *RE. Stratonike*, Nr. 8 (1931) 319-320.

二

アンティオコス一世と結婚したのちのストラトニケについては、碑文にその名を止めるのみで、それもほとんどの場合、年代を追うことが困難なものばかりである。その一例は、アンティオコス一世の王妃として、小アジアのギリシア都市から受けた崇拜の記録である。エーゲ海域の諸都市は、そこに進出したヘレニズム君主達の勢力下におかれ、それぞれの王権に迎合して君主礼拝を盛んにするが、アンティオコス一世も小アジア進出以後、小アジア諸都市に崇拜され、ストラトニケもともにその座を与えられた。他の例は、彼女が父デメトリオスを追憶したもので、その記録は多く残っている。それにストラトニケ自身の信仰に関ると考えられるものがあり、それらはセレウコス朝の王権と切放すことも可能ではなからうかとおもわれる。この問題は後述するスミルナにおける彼女の立場と合わせて考察したい。

そこで、まずアンティオコス一世とともに崇敬されたストラトニケをみることにする。アンティオコス一世は登極後、王国の混乱を克服し、さらに小アジアに侵入したガリア人に戦勝しているが、イリオンはこの王を称える都市の決議をなした(前二七五／四年)。その頌徳文の中に、「王と王の妹にして王妃、友人ならびに軍隊に幸運あらんことと、なおそのうえにあらゆる善きことが王と王妃にあらわれ、かれらが進めているその意図と同じ発展が、政策と王国において善き方向をとり続けてゆきますようにと、イリオンのアテナに女神官、神殿管理者が使節とともに祈願す

ることを、評議會ならびに民会において決議した。」(OGIS 219, II, 19-26) とある。ここに記されている王とはアンティオコス一世であり、王の姝にして王妃とあるのは、いうまでもなくストラトニケに他ならない。現在知られているかぎり、セレウコス朝において王妃を姝と呼称する表現は、このイリオンの決議文をもって始めとされる。このような呼称は、ヘレニズム時代まずプトレマイオス二世が実姉アルシノエ二世を王妃とした時に始まる。彼女はプトレマイオス朝の勢力を小アジア西南岸に扶植してゆき、プトレマイオス王国の黄金時代を出現させ、生存中すでに神格化されて王国の祭儀に組入れられている。アルシノエ二世の没年は前二七〇年であるから、ここで問題としているイリオンの都市決議文は、彼女の勢力が絶大であった時期に当る。また彼女の像をストラトニケが奉獻している事實は、両者の間に交友があったことも予想され、それらを勘案すればイリオンがアルシノエ二世に倣って、ストラトニケを形式的にせよ、王の姝にして王妃という表現を用いたとも考えられる。もちろん、これは都市がセレウコス朝に与えた追従的な讚美の言葉であるが、そこには王の満足感を煽るものがあつた。しかし、そのような王の姝にして王妃という呼称は、王の許可をえてなされたのかも知れない。ともかくも、都市によって王が頌徳され、さらに崇拜されてゆく時、その中に王家の女性も含まれており、そのような形式は後のアンティオコス三世による王妃ラオディケ崇拜の布告から知られるように、しだいに王国祭儀の中に取入れられるようになる<sup>(1)</sup>。

また、アンティオコス一世の晩年、イオニアの諸都市は、アンティオコス一世を崇敬する決議文を彼に手渡している。年代は不詳であるが、前二六六―二六一年のころとおもわれる。その中で、アレクサンドロスとともにアンティオコス一世の誕生日を祝う盛大な祭典をとりおこなっており、そこにおいて王アンティオコスと王妃ストラトニケは崇拜されていることを知られるであろうと述べ、さらにその後、次のように続ける。「この場における都市連合は諸

神、諸女神、ならびに王安ティオコス、アンティオコス、王妃ストラトニケのために供儀をおこない、供儀を終えて都市会議の者達、それに都市の全ての他の者達は冠をつけ、神官と女神官は神殿を開き、それらの者達によって、王安ティオコス、アンティオコス、王妃ストラトニケのためと、この崇拜に参加する諸々に善かれと、皆一致して定めたることを祈りたい。」(OGIS 222, II, 31-40) とある。またテオスでは「王安ティオコスと王妃ストラトニケそして王にして救済者アンティオコス……」とされている。<sup>(8)</sup> 以上のようにストラトニケはアンティオコス一世とともに、公式にその名をあげられる場合、王妃とされている。

ところが他方では、セレウコス朝を全く無視した記録がある。「王デメトリオスの娘ストラトニケ、王プトレマイオスと王妃ベレニケの娘、王妃アルシノエのために(像を奉献す。)(OGIS 14)、という刻文がそれである。これにおそらく関係があるうか、ストラトニケによるエジプト神アヌビス崇拜が知られている。スミュルナの碑文には、「アヌビスに、王妃ストラトニケのためと、アルキゲネスの子ヘラクレイトス、ならびにアヌビス信者達それぞれのために、すなわちアポロニオスの子フィロデモス(以下人名)……」(Michel, *Recueil* 1223) とある。W. W. Tarn によれば、ストラトニケはアルシノエ二世の友であって、彼女がエジプトで流行していた信仰に接触するようになり、スミュルナに住んでいたことから、そこでアヌビス信者の結社に入ったとする<sup>(9)</sup>。確かに兩人の間には、セレウコス朝とプトレマイオス朝の政治上の問題を離れた関係があったとおもわれる。その事情はともかく、アヌビス信者が王妃ストラトニケと呼んだことは別としても、ストラトニケがアルシノエ二世像奉献に際して、なぜデメトリオスの娘とのみ記したのであるうか。その像が何時、どの場所で奉献されたかは定かでない。それはストラトニケが、まずセレウコス一世と結婚する前であったかも知れない。しかしそう断定しうるような資料は見当らない。むしろア

ンテイオコス一世との結婚後において、彼女自身の周辺に何か問題があったのではなからうか、ということである。そこで、ストラトニケがストラトニケまたは王妃と記されたものと、デメトリオスの娘ないしデメトリオスとフィラの娘を加えて記されたものを比較し、それによって後者の場合が何時ごろであろうかを、ストラトニケに関する資料を検討するためにも、以下にあげてみたい。ストラトニケはデロスのアポロン神殿に多くの品々を奉献しているが、それらは神殿財の目録の中に記録されており、ほとんどがデメトリオスの遺品である。ヒュプソクレスのアルコンの年(前二七九年)には、「ストラトニケがデキオスに鍔を作らせた家、ニテラクマ」(IG XI, 161, A, II, 91-92)、同じく「王妃ストラトニケの献物、二つの皿」(IG XI, 161, B, 1, 15)。「ストラトニケの献物、デメトリオスの首飾、皿、足飾」(IG XI, 164, A, II, 74-75)。「アンテイモノスのアルコンの年(前二七四年)」、「ストラトニケ、デメトリオスの首飾、皿、足飾を奉献す、重さ不明」(IG XI, 199, B, 1, 51)、同じく「方形の容器の中にバロス石の皿、三重、マケドニア人ストラトニケ奉献す」(IG XI, 199, B, 1, 71)とてろが、ソステネスのアルコンの年(前二五〇年)以後に整理された目録には、異なった表現がとられている。ソステネスの年には、「王デメトリオスの黄金の首飾、足飾、腕輪、ならびにストラトニケ奉献の重さ不明の紅容器」(IG XI, 287, B, II, 20-21)とあるが、それはともかく、同年のものに次のように記されている。「献像を飾る冠、その重さは紐とともに一四四ドラクマ、献像を飾るもう一つの黄金の冠、それはデメトリオスの娘にして王妃ストラトニケの奉献によるもの、黄金の重さ三二ドラクマ、デメトリオスの娘にして王妃ストラトニケがレットに奉献したる黄金の首飾、四八環からなり、重さ一〇九ドラクマ四オボロイ」(IG XI, 287, B, II, 66-69)。またデマレスのアルコンの年(前一七九年)には、「王デメトリオスとその妃フィラの娘にして王妃ストラトニケ」また「王デメトリオ

スの娘にして王妃ストラトニケ」(Inscriptions de Délos, 442, B, II, 33, 185, 198)とある。このようにストラトニケの名に関して、付された名称の相違は W. W. Tarn が指摘する通り、デロスの記録では前二五〇年を境とすることができる。<sup>(5)</sup> またサルディスにおいても、「アンティゴノスの息子デメトリオスの娘ストラトニケの(奉献)」と刻された球がアルテミス神殿近くで出土している。これはストラトニケがアルテミス神殿へ奉献した物を記念して、刻されたものと推定されている。したがって、ストラトニケは広くデメトリオスの娘を名告ったとおもわれるが、その時期についてはアンティオコス一世の晩年近くか、あるいは彼の没後(前二六一年以後)と考えられる。しかし前述のように、イオニア諸都市によるアンティオコス崇敬の決議文からみて、ストラトニケはアンティオコス一世の晩年においても公式にはアンティオコスの王妃とのみ称されている。それは当然としても、彼女がアンティオコス一世の生存中に、ただデメトリオスの娘とのみ名告ることを許されたことには疑問がある。

では、ストラトニケがアルシノエ二世像を奉献した時期であるが、W. W. Tarn は王妃ヘレニケの語を取上げ、アルシノエ二世の母ベレニケが王妃となったのは前二九四年以前でないことから、早くは前二九三年より、おそらくアルシノエ二世の没時、すなわち前二七〇年までとする。<sup>(7)</sup> しかしデメトリオスの娘ストラトニケの語に固執するならば、アルシノエ二世の没後、さらにはアンティオコス一世の没後におくことも可能であろう。

ところで、ストラトニケが、なぜデメトリオスの娘と名告るようになったかという理由であるが、この問題は難解である。が、セレウコス王家の内部事情にその原因が潜んでいたと憶測すれば、ストラトニケとアンティオコス一世の結婚に問題がなかったとは言切れないし、それに前二六八年に二人の間に生まれた長子で、アンティオコス一世の共同統治者であったセレウコスが、陰謀の嫌疑により処刑されたことも、ストラトニケに非常な衝撃を与えたであろう。<sup>(8)</sup>

う。また、かつてデロス、エーゲ海の支配者であった父デメトリオスに対する追憶は、デロス奉獻品にみられる通りであるが、さらに娘フィラがストラトニケの兄アンティゴノス・ゴナタスに嫁したことは、ますますアンティゴノス王家への郷愁をかきたてたかも知れない。そして、それに呼応するものであろうか、アンティゴノス・ゴナタスはストラトニケの没後、彼女のためにデロスで祭典を催している。<sup>(6)</sup>

これに加えて、ストラトニケは信仰心の篤い、宗教活動に本領をえた女性であったといえよう。デロスのアポロン、エジプト神アヌビス、サルディスのアルテミス、後述するスミルナのアフロディテ等の崇拝はもとより、また彼女はシリアにおけるヒエラポリス(パンビュケ)のアタルガティス神殿を再建したと伝えられる(Lucian. de dea Syr. 17, 19)。ストラトニケに、まさに当時のシンクレティズムを見出すことができる。そういう彼女の一面を考慮したうえで、次にアフロディテ・ストラトニキスの問題を取上げてみたい。

註(1)

前二〇四年にアンティオコス三世が、王妃ラオディケの崇拝を要求した書簡の中で、「われわれは兄妹たるラオディケの崇拝をなお一層にせんことを願っているゆえに」(Welles, R.C. No. 36 II. 2-3)とあり、このラオディケとはポントス王ミトリダテスの娘で、アンティオコス三世にとっては従妹に相当 (Welles, R.C. p. 158; J. Seibert, *Historische Beiträge zu den dynastischen Verbindungen* (1967) S. 60)。

なおアンティオコス三世以前については、アンティオコス二世の王妃ラオディケに関してポリュアイノスは、「神と称されたアンティオコスは同父妹のラオディケと結婚した」(Polynaios VIII, 50)とあげてゐる。しかしこのラオディケはアカイオスの娘と考えられ、ポリュアイノスの記述に批判がなされてゐる (F. W. Walbank, *A Historical Commentary on Polybios*, Vol. 1 (1957) p. 501; J. Seibert, a.a.O., S. 55)。

また、セレウコス四世時代の前一七七／六、スウサすなわちヘウライオス河畔のセレウケイアで、セレウコス王家の女性に対する崇拝の祭儀が執行されたとおもわれる記録がある (SEG VII, 2; Welles, R.C. pp. 159-160)。



- (2) C. Habicht, *Gottmenschen und griechische Städte* (1970) S. 102.
- (3) W.W. Tarn, *Antigonos Gonatas*, p. 349.
- (4) W.W. Tarn, *op. cit.*, p. 356 n. 27. Tarn は、奇妙なマケドニア人ストラトニケの語は、正しく書き残されたものかも知れない。
- (5) W.W. Tarn, *ibid.* また別に王妃ストラトニケと記したデロス碑文がある。それも前二五〇年を境として考える取扱いも可能ではなかろうか。「ディオドロスの子ティモナクスの提案により、評議会ならびに民会の決議。すなわち、テレスノスはテロスの市民にアスクレピオスと王妃ストラトニケの像の作成を依頼され、市民に贈ることとなった。その像の一つ、アスクレピオスの方はブロンズで、他方、王妃の方は大理石で作成。彼はこれらの像をよく完成し、全精力を傾けてなしとげ……」(F. Durrbach, *Choix d'Inscriptions de Délos* No. 16) とある。ここにみえるストラトニケは、問題として取上げているストラトニケとすることに現在異論はない。碑文年代について、Durrbach はストラトニケがセレウコス一世と結婚した時期と考えるが、もちろんそれ以後とすることも可能である。
- (6) W.H. Buckler and D.M. Robinson, *Sardis*, Vol. VII Part I (1932) No. 86 pp. 91-92.
- (7) W.W. Tarn, *op. cit.*, p. 351 n. 27. cf. G. H. Macurdy, *Hellenistic Queens* (1932) pp. 105-106.
- (8) Stahelin, *RE. Seleukos* Nr. 3 (1921) 1234-5.
- (9) W.W. Tarn, *op. cit.*, p. 352 n. 28.

### 三

さて、ストラトニケとスミルナの関係についてであるが、スミルナにおける記録では、この都市とシピュロス山近くのマグネシアとの条約文に見出せる。その条約文の冒頭、スミルナ側に関して以下のように述べられている。「ストラテゴス達の提案にもとづき、市民による決議。すなわち、かつて王セレウコスがセレウコス王国領に遠

征したる時、われわれの都市と領域は幾多の大きいなる危険に晒されたが、しかし恐れることなく、また破壊される心配もなく、市民は彼に対する好意と友愛を持ち続けた。そして、むしろそれを意に介することなく計画を持続し、いかにあろうとも始めからの約束どおりに彼の勢力に援助した。それゆえ王セレウコス<sup>1</sup>は神々に敬虔で、生まれたる者には愛情深く、また寛大にして、彼のために為したいかなる奉仕にも感謝の念をあらわし、市民が彼の成さんとすることに誠意をもって支持したるその好意と熱意に対して、われわれの都市に十分な榮譽をほらした。また彼の父、神なるアンティオコスと、彼の父の母、神なるストラトニケのために、われわれ、すなわち市民は共同して、また市民の各々によって、特別の崇敬がはらわれる。また(セレウコスは)市民のために自治と民主政体を確立し、さらにアフロディテ・ストラトニクスの神殿が不可侵であり、われわれの都市もまた神聖にして不可侵なることを、諸王、諸侯、諸都市、諸族へ書き送った。』(OGIS 229, II. 1-12)とある。これは、セレウコス二世対プロトレマイオス三世の抗争の際、スミュルナがよくセレウコス二世を支持したこと、またセレウコス二世にアフロディテ・ストラトニクス神殿の不可侵と、都市の神聖と不可侵を確認させ、なおそのことを広くヘレニズム世界に宣言させたことを示している。この条約文そのものは、セレウコス二世登極(前二四六年)後におこった対プロトレマイオス三世戦が一応終つてからのものであり、スミュルナがシピュロス山近くのマグネシアにセレウコス二世を支持するよう勧めて、その誓約をなしたものである。<sup>(a)</sup> こうしたスミュルナの強いセレウコス二世支持は、彼に対する称揚となつて現われている。

では、セレウコス二世の父アンティオコス二世と、その母ストラトニケに対する崇拜であるが、その理由をまず前者の場合から考えてみる。アンティオコス二世に対する崇拜は、彼がセレウコス二世の父であつたという理由だけではなからう。彼はプロトレマイオス二世の小アジア進出を抑えて、イオニア諸都市に王権を及ぼし、ミレトス、サモス、

エリュトライ、それにスミュルナも入るであろうが、それらの都市に、いわゆる王の恩恵としての都市の自由を与えた。<sup>(2)</sup>つまり、アンティオコス二世によってスミュルナの自由が承認されたことであり、それをのちにセレウコス二世が再確認したとできよう。さらにスミュルナではアンティオコス二世への崇拜を都市の主要な祭典とした。<sup>(3)</sup>またスミュルナの暦と認められたものに、十二ヶ月の月名がみられるが、その中でストラトニコス、アンテオス、ラオディコスとある。それらはセレウコス王家の者達の名に由来するものであると確認され、アンテオスはアンティオケオンで、アンティオコス二世、ラオディコスは王妃ラオディケを指す。<sup>(4)</sup>ラオディケが王妃であったのは、王位にあったアンティオコス二世が彼女を離婚し、プトレマイオス二世の娘ベレニケとの婚約が調うまでであり、前二六一―二五四年とすることができよう。また彼女が再び王妃の座をえたとすれば、息子のセレウコス(二世)が王位相続者と定められからであろう。<sup>(5)</sup>ともかくも、スミュルナがアンティオコス二世の名を月名に取入れたのは、彼を称えるためであり、それは当然、彼の生存中になされたと考えられる。またストラトニコスとは、先にあげたスミュルナの条約文の中で、アンティオコス二世とともに並べられた、この王の母ストラトニケを指すものといえよう。

そこで、ストラトニケの場合であるが、彼女はスミュルナでアンティオコス二世の母たる資格でもって崇拜されたのであろうか。とすれば、スミュルナはセレウコス朝に対する崇敬の意をあらわして、彼女の夫アンティオコス一世も崇拜して然るべきであらう。先にあげたスミュルナの条約文の中で、あとに「神なる救済者アンティオコス」(OGIS 229, 1. 100)とあり、この時期に救済者の名を付されたセレウコス朝の王はアンティオコス一世である。ところが、あとにアンティオコス一世が記されながら、冒頭においてはストラトニケのみで、彼の名が見当らないことは、ストラトニケに、スミュルナの暦にみられるとおり、特別の立場が認められる。

また、同条約文の中で、アフロディテ・ストラトニクス神殿という件がみられる。これとストラトニケを結びつけることには、異論は全くないとはいえないが、諸家の見解は肯定的である。<sup>(6)</sup>つまり、ストラトニケはスミュルナでアフロディテと習合されて崇拜され、神殿を建立されているのである。他に、アフロディテ・ストラトニクスとその神殿に関しては、同じ条約文にもみられ、スミュルナが誓約した個所で、「ゼウス、大地<sup>ゲイ</sup>、太陽<sup>ヘリオス</sup>、アレス、アテナ・アレイアそしてタウロポロス(アルテミス)、そしてシピュロスの母(地方神)ならびにアフロディテ・ストラトニクス、また諸々の男神、女神に誓う。」(OGIS 229, II, 70-71)。また「スミュルナはその条約を白大理石に刻み、それをアフロディテ・ストラトニクス神殿とマイアンドロス河畔のマグネシアのアルテミス・レウコフルエネ神殿に建てる。」(OGIS 229, II, 83-84)とある。さらにデルフォイの決議文の中にもみられるが、その全文を掲げてみる。「神々よ。王安ティオコスの子、王セレウコスが、デルフォイの都市に、アフロディテ・ストラトニクス神殿ならびにスミュルナ市が神聖にして不可侵であることを要求する書簡を送ってきた。彼は先に神託を伺い、それをなすことを都市に許可した。すなわち、スミュルナ人に都市とかれらの領土は自由で、免税であり、かれらに属す領域を確保し、以前の所有領の返却を約束した。なおまたデルフォイにヘルモドロスとデメトリオスの二人の使節を送ってきたスミュルナ人は、王と同様に同じく、かれらが同意したことを神殿に刻まねばならぬ。そこで、デルフォイの都市は決議した。すなわち、アフロディテ・ストラトニクス神殿ならびにスミュルナ市は神聖にして不可侵であると、まさに王が声明し、スミュルナ市が要求したそれである。そのことは、上述の、そして敬虔な、神託に忠実な、アフロディテに供儀をなす、王セレウコスを称えて、ピュティア祭典の通告に回る神使<sup>テオクロイ</sup>に委託されよう。この決議は都市によって神殿の中に刻まれ、それに通告書は市議事堂の壁に刻まれよう。」(OGIS 228)。

スミルナがストラトニケを特に崇拜し、アフロディテ・ストラトニクス神殿を建立した理由は何であつたか。デルフォイの決議文の中で、セレウコス二世がアフロディテ・ストラトニクス神殿を不可侵としたのは、デルフォイの神託によるものとしている。また後年、小アジアの諸都市がローマに嘆願して、都市の特権を承認させようとした時、紀元後二二年にスミルナは、アフロディテ・ストラトニクス神殿の建立がアポロンの神託によるものと主張した、とタキトゥスは述べている (Tac. ann. III 63)。神殿の建立がデルフォイのアポロン神託によつたという理由があるとしても、あるいはセレウコス二世の要求によるものと推定してみても、ともかくそれより先にストラトニケがスミルナで特に崇拜される経緯がなくてはならない。もちろん憶測の域をでないが、既に述べたようにストラトニケ自身の信仰から考えることができよう。つまり、ストラトニケがアフロディテの信者として、その宗教結社で重要な地位を占めたことと、それに都市による王家崇拜も絡み、しだいにアフロディテ・ストラトニクスたる崇拜を受けるようになったのではなからうか。それが早くは彼女の生存中であつたかも知れないが、死後(前二五四年没)は確実となり、スミルナに広まつたとおもわれる。いづれにしても、アフロディテ・ストラトニクス崇拜が形成されてゆくのは、アンテオコス二世時代で、セレウコス二世時代とはいえない。

ところで、アフロディテ・ストラトニクスがスミルナの都市共同体の主要な神の地位をえ、その神殿はデルフォイに承認された不可侵の権限を有している。デルフォイの權威にもとづかねばならぬ理由は、一つに当時なおデルフォイ神託は効力をもち、形式的にもせよ、それによつて神殿を建立したとすれば、神殿の威光も高まり、都市自体にも同様に神聖と不可侵の権利を主張して戦乱を回避でき、エーゲ海域においてその立場を有利にしたことである。他に、デルフォイはアイトリア同盟下であり、ことに恐れられていたアイトリア人の海賊行為の難を逃れるためにも、



- (4) ノートンシヨの題 Hemerologium Florentinum の中で、ノシントヨ由来の事柄を記したものが、十一月の月名があらわに記してある。W. Kubitschek 著、L. Robert (BCH 54, 1930, 328 n. 4. REA 38, 1936, 23-25) 著、Antes 著 Antiocheon 著、Anton 著、C. J. Cadoux, op. cit., p. 109 n. 4.; C. Habicht, a.a.O., S. 100 Anm. 4.
- (5) C. J. Cadoux, *ibid.*; C. Habicht, a.a.O., S. 101.
- (6) Bischoff, RE, Stratonikis (1931) 325-326, 及び C. Habicht, a.a.O., S. 100 Anm. 7 参照。
- (7) W. W. Tarn, Antigonos Gonatas, p. 349; vgl. C. Habicht, a.a.O., S. 101; E. R. Bevan, op. cit., p. 177.
- (8) M. Rostovtzeff, The Social and Economic History of the Hellenistic World (1953) 198ff.
- (9) E. Bourguet, Fouilles de Delphes, III, 1 (1929) No. 483 の復元に関する論議を参照。解説を参照。W. S. Ferguson, Athenian Tribal Cycles in the Hellenistic Age (1932) 112ff.
- (10) C. J. Cadoux, op. cit., p. 112 n. 1. B. V. Head, Historia Numorum<sup>2</sup> (1911) p. 593.

#### 四

ヘレニズム時代、セレウコス朝やプトレマイオス朝はじめ、各王家の女性の多くは、政略結婚という運命に翻弄された。またそのために、自ら政争に介入せざるをえず、悲惨な結果に終わった者も少なくない。しかしアルシノエ二世は成功した。時代の脚光を浴びたこのアルシノエ二世と、彼女と交友のあったストラトニケを比較するとき、両者は非常に対照的とおもえる。アルシノエ二世は、ディアドコイ時代、すでに才能を現わしながらも、境遇に恵まれなかったが、三度目にプトレマイオス二世と結婚したのち、存分に政治手腕を発揮した。そして生前にフィラデルフオス女神として王国の祭儀に組入れられた。また死後、民間ではアフロディテと習合され、崇拜を受けている。<sup>(1)</sup>

習合がヘレニズム時代、女性にみられる最初の例とすれば、アフロディテ・ストラトニキス崇拜は、アルシノエからの影響を予測できなくもない。この点は別として、一方ストラトニケに関して知りうることは彼女の宗教活動である。ヘレニズムの一特徴として、シンクレティズムの動向をみる事ができるが、一つの神性の中に、様々な神の現われを認めようとしたストラトニケの諸神崇拜は、それを如実に示したといつてよく、<sup>(2)</sup>ここに彼女の生き方の一面をとらえてよからう。

註(1) M. P. Nilsson, *Geschichte der griechische Religion*, Bd. 2 (1950) S. 151; E. R. Bevan, *The House of Ptolemy* (1927) p. 129.

(2) W. W. Tarn, *Hellenistic Civilisation*, p. 339; C. J. Cadoux, *Ancient Smyrna*, p. 108 n. 2.